

大学生の適応に影響を与える要因に関する考察

—ソーシャルスキル, 交友関係などの観点から—

Effects of Some Elements on Adjustment among College Students:
From the Standpoint of Social Skills and Friends' Circle

樋口 康彦
HIGUCHI Yasuhiko

はじめに

入学したものの毎年多くの大学生がその後不適応を起こし大学を去って行く。休学事由として多いのは、精神的な理由、交友関係、金銭的な理由であり、退学理由として多いのは、一身上の都合、勉学意欲をなくした、怠学により卒業できない、就職が決まった、他校への進学(編入)などである。

せっかく入学したものの途中でやめていくのは大変残念なことである。そこで本研究では大学生の大学適応に影響を与えている要因について明らかにすることを目的に調査を行う。性格特性や動機付けなどの観点から大学に適応するためには何が必要なのか、また生きがいを持って充実した日々を送るためには何が必要なのか、また回りの教師や親はどのように大学生をサポートしていけば良いのか、について述べていきたい。

本調査

調査時期 2006年1月。

被験者および調査方法 富山県下の大学生、計117人(うち男子68人、女子49人、平均年齢=20.54歳、SD=1.86)を被験者に用いた(詳細については Table 1 参照)。調査方法としては、授業時間中にアンケート用紙を配布し回答を求めた。一部は留置法を用い、質問紙を自宅に持ち帰ってもらい、後日回収した。

Table 1 被験者の内訳

学 年	性 別		合 計
	男 子	女 子	
1 年 生	25	9	34
2 年 生	23	12	35
3 年 生	19	25	44
4 年 生	1	3	4
合 計	68	49	117

質問項目の構成

1. 大学に対する適応感 河村(1999)などを参考にして、「全体的に言って、私は大学生生活を楽しんでいる。」「この大学は私にはあまり向いていないと思う。(逆転項目)」「この大学にとけ込めていないと感じる。(逆転項目)」「他の人にくらべて、私は楽しい大学生生活を送っていると思う。」「大学での生活に不満はない。」といった計5問を作成した。そして、「以下の項目を読んでそれぞれが、あなたにどの程度あてはまるか、例にならぬ該当する番号に丸印をつけて下さい。」という教示の後、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。なお、下の「9」まで、与えた教示は同じである。

2. 将来に対する不安感 将来に対し、どの程度の不安感を持っているかは、適応や生きがいのひとつの指標であるという考えから調査することにした。藤井(1998)などを参考にして、「会社でうまくやっていけるかどうか不安である。」「就職活動のことを考えると、不安になる。(就職先などが決まっている人は「...不安だった」と読み替える)」「私は社会でうまくやって行けると思う。(逆転項目)」「社会人になることに不安は感じない。(逆転項目)」「就職活動のことを考えると、気がめいってしまう。(就職先などが決まっている人は「...めいった」と読み替える)」「できれば社会人になりたくないと思う。」といった計6問を作成した。そして、計6項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

3. 生きがい(社会に対する適応感) 大野(1984)、内田(1990)などを参考にして、「毎日が孤独でさびしい。(逆転項目)」「充実した毎日を送っている。」「やる気が出ず、ゆううつな気分で毎日を過ごしている。(逆転項目)」「生きがいを持って毎日を送っている。」「あじけない毎日を送っている。(逆転項目)」といった計5問を作成した。全体的に社会に対する適応感を表す内容になっている。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

4. 家族関係に対する満足度 内田(1988)などを参考にして、「家族と一緒にいると本当に楽しい。」「私の家族は、いつも互いに助け合う。」「家族のみなんで何か(旅行、買い物、ゲームなど)をすることがよくある。」「あまり家族と一緒にいたくない。(逆転項目)」「家族との関係はうまく行っている。」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

5. 大学の授業に対する満足度 河村(1999)などを参考にして、「大学での勉強を楽しんでいる。」「大学の授業は私を成長させてくれると思う。」「大学で授業を受けるのは楽しい。」「大学での単位の取得は順調に進んでいる。(1年間で40単位くらい)」「今大学で勉強していることは、将来きっと役に立つと思う。」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

6. 大学での交友関係に対する満足度 「大学に行く時は、友人に会うのを楽しみに思う。」「大学で昼食をとる時はたいいてい(2回に1回以上)友人(※彼氏や彼女を含む)と一緒に食べる。」「大学の友人とよく(平均1ヶ月に1回以上)一緒に遊びに行く。」「大学には互いを理解し合える友だちがあまりいない。(逆転項目)」「講義

はたいてい一人で受ける。(逆転項目)」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

7. クラブ活動に対する満足度 樋口(1996)などを参考にして、「私のクラブ(サークル)活動は充実していると思う。」「私はクラブ(サークル)活動を楽しんでいる。」「私の生活にとってクラブ(サークル)活動はなくてはならない。」「私にとってクラブ(サークル)は居心地が良い。」「私が所属しているクラブ(サークル)は、ほのぼのとした温かい雰囲気がある。」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

8. 大学以外での交友関係に対する満足度 「大学以外に友人がたくさんいる。」「この大学の人以外に、友人はほとんどいない。(逆転項目)」「大学以外の友人(※彼氏や彼女を含む)とよく遊びに(食事やカラオケなど)に行く。」「悩み事を相談できる友人が大学以外にたくさんいる。」「大学以外の多くの友人と、電話やメールのやり取りをする。」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

9. アルバイトに対する満足度 「私のアルバイト先は、全体的に温かい雰囲気がある。」「私はアルバイトを楽しんでいる。」「今のアルバイト先で働けることは、運が良かったと思う。」「できるだけ早く別のアルバイト先に変わりたい。(逆転項目)」「アルバイト先にはたとえアルバイトをやめても友人付き合いをしたいと思う人がいる。」といった計5問を作成した。そして、計5項目に対し、非常によくあてはまる(5点)、あてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あてはまらない(2点)、全くあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

10. ソーシャルスキル 菊池(1988)などを参考にして、「身だしなみをしっかりする。」「正しい礼儀作法で人に接する。」「人との会話をうまく運ぶ。」「人に良い印象を与える。(責任感がある, 誠実といった印象を与える)」「人のしぐさを正しく読み取る。」「人の話をうまく聞く。(話の聴き方)」「相手の本心を見抜く。」「うまく仲間に入れてもらう。」「いやなことをたのまれたら、うまく断わる。」「その場にふさわしい振るまいをする。(場の空気を読む)」「人間関係のトラブルをうまく処理する。(問題処理の仕方)」「自分の感情・行動・表情をコントロールする。」「人と心理的に適切な距離を取る。」といった計13問を作成した。そして、「あなたは以下にあげる能力についてどの程度自信がありますか。該当する番号に丸印をつけて下さい。」という教示を与えた後、計5項目に対し、非常に自信がある(5点)、自信がある(4点)、どちらともいえない(3点)、自信がない(2点)、全く自信がない(1点)までの5件法で回答を求めた。

なお、質問紙の具体的な構成に関しては添付資料を参照のこと。

結果と考察

1. 各尺度の信頼性の検討

尺度の信頼性を確かめるために α 係数を算出した(Table 2 参照)。全て満足すべき値となっている。このことから尺度の信頼性は保たれているとした。

Table 2 各変数の α 係数

	α 係数
大学に対する適応感	.82
将来に対する不安感	.80
社会に対する適応感	.84
家族関係	.86
大学の授業	.83
大学での交友関係	.76
クラブ活動	.91
大学以外での交友関係	.83
アルバイト	.82
ソーシャルスキル	.92

それから参考のため各変数の平均値とSDを算出した。(Table 3 参照)

Table 3 各変数の平均値とSD

	平均値(SD)
大学に対する適応感	12.38(3.99)
将来に対する不安感	15.53(4.68)
社会に対する適応感	12.96(4.26)
家族関係	14.24(4.53)
大学の授業	14.18(3.97)
大学での交友関係	13.19(4.48)
クラブ活動	12.91(5.57)
大学以外での交友関係	13.86(4.50)
アルバイト	15.27(4.36)
ソーシャルスキル	30.71(8.52)

2. 変数間の関係についての考察

各独立変数と各従属変数がどのような関係を持っているのかを調べるために、相関分析を行った。結果はTable 4に示す通りである。まず大学に対する適応感について見てみると家族関係が強い正の関係を持っていることがわかる。このことは、安心できる家族があって初めて、外の世界に適応できるということを表しているのだと思われる。あるいは、健全な家族の元で環境への適応力が育まれ、それが高

い適応感と結びつくということを表しているのかもしれない。授業、大学での交友関係、(クラブ活動をしている学生に関しては)クラブ活動が大きなプラスの相関を示している。これらのことが統合されて大学への適応感が決定されるということであろうと思われる。大学以外での交友関係、アルバイトも有意な正の相関を持っていることに関しては、大学への適応には、環境への適応力が関係しており、適応力の高い学生は、他の場面でも適応できるということを示しているのではないだろうか。

Table 4 各変数間の相関分析

	大学に対する適応感	将来に対する不安感	生きがい
家族関係	.545 **	-.100	.357 **
大学の授業	.614 **	-.038	.336 **
大学での交友関係	.417 **	-.294 **	.493 **
クラブ活動	.508 **	-.247 †	.576 **
大学以外での交友関係	.195 *	-.353 **	.426 **
アルバイト	.299 **	-.234 *	.243 **

註1 : † p<.10, * p<.05, ** p<.01

註2 : クラブ活動は n=55, アルバイトは n=81

次に将来に対する不安感について見てみる。大学での交友関係、大学以外での交友関係、アルバイトが有意なマイナスの相関を示している。この結果は家族以外の様々な人間関係の場に適応できないことが、将来に対する不安感を高めると解釈できる。逆に言うと様々な場面に適応することで自分に自信を持つことができ、そのことが将来を切り開く力となっていくのだと読み取ることができる。

最後に生きがい(社会に対する適応感)に関して見てみることにする。これも全ての従属変数と有意な正の相関を示している。生活の場における様々なことに対する適応感が寄り集まって生きがい(総合的な適応感)が形成されているということが見て取れる。ちなみに大学への適応感と生きがいは.708(p<.01)の相関を持っている。大学生にとって、主要な生活の場である大学への適応感はすなわち社会に対する適応感に直結していると言えるであろう。

以上の結果を総括すると、大学に対する適応感には大学における様々な場面での適応感が関係しているので、教師は、学生の授業への取り組みや交友関係などについて目を配っておかなければならないと言えるだろう。また、親は家庭を居心地の良い場所にするよう気をつけるとともに、大学の外での交友関係がうまくいっているかどうかなどに目を配らなければならない。一般的に言って、教師は学生の学外における状態に目が届かないし、逆に親は学生の学内における状態に目が届きにくいと言える。そこで互いに役割を分担し合いながら学生をサポートして行くことが大切であろう。

3. 適応感に影響を与える本人の要因に関する考察

適応感に本人の個人的な特性がどのように関係しているかを示すためにソーシャルスキルと様々な適応感について相関分析を行った。(Table 5 参照)

Table 5 ソーシャルスキルと各従属変数の関係

	ソーシャルスキル
大学に対する適応感	.267 **
将来に対する不安感	-.427 **
生きがい	.369 **

まずソーシャルスキルの高いことが大学への適応感および生きがいを高めることがわかる。また将来に対する不安感と強いマイナスの相関を示していることから、ソーシャルスキルの高い学生は適応力が高く、またこれまで様々な環境に適応してきた自信も持っており、そのことが将来遭遇するであろう新たな環境への不安感を低減すると読み取れる。

様々な経験を通して対人関係の技術を高めることが大切である。急に身につくものではないことから子どもの頃より気をつけなければならない。また本人に関しては、進んで人の中に飛び込んでいくこと、ソーシャルスキルを向上させようという気であることが大切であろう。

参考文献

- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**(6), 441-448.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度(高校生用)の作成
岩手大学教育学部研究年報, **59**, 111-120.
- 樋口康彦 1996 スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学
研究, **36**, 42-55.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究, **32**, 100-109.
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, **38**, 117-125.
- 内田利広 1988 家族風土スケールの作成とその適用の試み — 家族メンバーの自己実現度と家族の雰囲気との
関係 人間性心理学研究, **6**, 59-71.